
【テキスト中に現れる記号について】

《》：ルビ
(例) 私《わたし》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号
(例) 出版|書肆《しよし》

或春の午後であつた。私《わたし》は知人の田崎《たざき》に面会する為に彼が勤めてゐる出版|書肆《しよし》の狭い応接室の椅子《いす》に倚《よ》つてゐた。

「やあ、珍しいな。」

間《ま》もなく田崎は忙《いそが》しさうに、万年筆を耳に挟《はさ》んだ儘、如何《いかが》はしい背広姿を現した。

「ちと君に頼みたい事があつてね、実は二三日保養|旁《かたがた》、修善寺《しゆぜんじ》か湯河原《ゆがはら》へ小説を書きに行《ゆ》きたいんだが、……」

私は早速《さつそく》用談に取りかかつた。近々《きんきん》私の小説集が、この書肆から出版される。その印税の前借《ぜんしやく》が出来るやうに、一つ骨を折つて見てはくれまいか。これがその用談の要点であつた。

「そりや出来ない事もないが、しかし温泉へ行《ゆ》くなぞは贅沢《ぜいたく》だな。僕はまだ臍《ほぞ》の緒《を》切つて以来、旅行らしい旅行はした事がない。」

田崎《たざき》は「朝日」へ火をつけると、その生活に疲れた顔へ、無邪気な羨望《せんぼう》の色を漲《みなぎ》らせた。

「何処《どこ》へでも旅行すれば好《い》いぢやないか。君なぞは独身なんだし。」

「所が貧乏暇なしでね。」

私はこの旧友の前に、聊《いささ》か私の結城《ゆふき》の着物を恥ぢたいやうな心もちになつた。

「だが君も随分《ずゐぶん》長い間《あひだ》、この店に勤めてゐるぢやないか。一体今は何をしてゐるんだ。」

「僕か。」

田崎は「朝日」の灰を落しながら、始めて得意さうな返事をした。

「僕は今旅行案内の編纂《へんさん》をしてゐるんだ。まづ今までに類のない、大規模な旅行案内を拵《こしら》へて見ようと思つてね。」

底本：「芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1971（昭和46）年10月5日初版第5刷発行

入力校正：j.utiyama

1999年2月15日公開

2003年10月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。